

もう半分を、もう半分

登場人物

甚兵衛（40） だるま屋の店主

おつね（30） 勘兵衛の妻

新次（24） 昇り龍の店主

おサヨ（20） 新次の妻

乳母

赤子

老人（60）

EXT. 居酒屋「だるま」 — 夜

外は土砂降りの雨。

INT. 居酒屋「だるま」 — 夜

古びた板張りの壁が、風が吹くたびに不気味に鳴る。

カウンターの隅には、使い古された徳利と、欠けたお猪口。

甚兵衛（40）が、手持ち無沙汰にカウンターを拭いている。

その動きは緩慢で、雨のせいで客が来ないことに退屈している。

奥の小上がりでは、妻のおつね（30）が、行灯の暗い火を頼りに、内職の針仕事をしている。

老人（60）が、雨に打たれながら一人、カウンターの端に座っている。

彼の前には、空になったお猪口。

老人

……旦那。すまないが、もう半分、おくれ。

甚兵衛が動きを止め、老人をジロリと見る。

甚兵衛

じいさん。さっきから「半分、半分」って……。最初から一合頼めば、手間も省けるだろうに。

老人は、痩せこけた頬を緩め、恥ずかしそうに笑う。

老人

いやあ、そう言われるんだがね。一合をドンと出されると、つい景気よく飲んじまう。だが、こうして半分ずつ注いでもらうと……どういうわけか、なんだか得をしたような気になるんで。

甚兵衛は鼻で笑い、一合升から半分だけ、老人の徳利に酒を移す。

甚兵衛

妙なところで得をしたがるね。……ほらよ。

老人

かたじけない。……ああ、この半分が、五臓六腑に染み渡るんだ。

老人は大切そうに、震える手でお猪口を口に運ぶ。

おつねが、針を止めて顔を上げる。

おつね

おじいさん。そんなにゆっくりしていいのかい？ 家族はいないのかい？

老人

ああ、それなんだ。今日、ようやく娘を身請けに行ける目処が立ってな。明日の朝一番で会いにいく。今夜は、その前祝いさ。

老人は嬉しそうに、大事そうに脇に置いてある汚れた風呂敷包みを撫でる。

甚兵衛とおつねが、一瞬だけ目を見合させる。

沈黙が流れる。

INT. 居酒屋「だるま」 — 深夜

老人が去った後の静まり返った店内。

おつねが掃除を始めようとして、老人が座っていた席の下に目を止める。

おつね

……おまえさん。これ。

そこには、先ほどの風呂敷包みが残されている。

甚兵衛

じいさんの忘れもんか。さっき出ていったばかりだ。まだ近くにいるかもしれないねえ。

甚兵衛が歩み寄り、包みを手に取る。

おつね

待ちな。

甚兵衛が立ち止まる。

おつね

中を開けてみようじゃないか。

甚兵衛

.....

甚兵衛、ためらいながら、ゆっくりと包みを解く。

中には、ずっしりと重い桐箱。

桐箱の紐を解くと、鈍い金の光が、狭い店内を照らし出す。

甚兵衛（息を呑む）

.....こりやすげえ。

おつね

.....。

甚兵衛

おい。本物の金貨だ。小判が、ぎっしり詰まってやがる。

おつね（震えながら、小声で）

.....これで、店が持てるね。おまえさんがずっと言ってた、表通りに、大きな暖簾を掲げた店が。

甚兵衛

お前、まさかネコババしようって腹か？

甚兵衛は金をじっと見つめる。

額に汗が滲む。

その時、外で、激しく戸を叩く音。

ドンドン、と心臓を叩くような音。

甚兵衛

じいさんだ！ やっぱり返さねえと——

おつね（甚兵衛の腕を掴む）

あんた、嘘はいけないよ。あんただって、本当は欲しくてたまらないくせに。

甚兵衛

.....

老人（O.S.）

旦那！ おかみさん！ 開けておくれ！ 忘れたんだ、命より大事なものを！

おつねが素早く風呂敷包みを隠す。

甚兵衛が、意を決して戸を細く開ける。

雨の中、老人が泥まみれになって立っている。

老人

旦那！ あの、包みが……ここに置いてあったはずなんだ！

甚兵衛（努めて冷静に）

包み？ 何のことだ。うちにはそんなものなかったが。

老人

そんなはずはない！ 確かにここに……。お願ひだ、もう一度中を見せてくれ！

甚兵衛

しつこいな。おつね、何かあったか？

おつね（奥から冷ややかに）

いいえ。座布団の一枚も落ちてやしませんよ。

老人

……嘘だ。そんなはずは……。

老人の膝が崩れる。

雨水が彼の顔を伝い、涙のように見える。

老人

あの金がないと、娘を連れ戻せないんだ……。

甚兵衛

……知らないといってるんだ。

老人

ほんとうに返してくれないんだな？

甚兵衛（むっとして）

こう疑われたんじゃかなわねえ。さあ、もう店は閉めだ。とっとと行け！

甚兵衛は力任せに戸を閉め、門をかける。

外から、老人の嗚咽と、雨の音だけが聞こえてくる。

やがて、その嗚咽も、遠ざかっていく。

EXT. 永代橋 — 深夜

土砂降りの雨。

老人が橋の欄干に立っている。

下を流れる漆黒の川。

老人の目に、先程までの悲しみはない。

あるのは、冷徹なまでの「確信」。

老人

……もう半分を……もう半分。

老人は口角を吊り上げ、歪んだ笑みを浮かべる。

そして躊躇なく、闇の中へと身を投げた。

EXT. だるま屋 — 店内— 1年後・夜

SUPER: 「一年後」

かつての薄汚れた居酒屋の面影はない。

豪華な装飾、磨き上げられた床。

満員の客相手に、複数の奉公人が忙しく働いている。

INT. 新築の大きな商家 — 広間 — 夜

甚兵衛（40代）とおつね（30代）は、高級な絹の着物を着て、くつろいでいる。

おつねは、ふくらみを帯びた腹にそっと手を当てている

甚兵衛

明日は鎌倉参りにいこう。店は番頭に任せておけばいい。

おつね（腹をさすりながら）

ええ。運に恵まれたおかげで、産まれてくるこの子も不自由なく育てられます
わ。

INT. 同・廊下 — 数ヶ月後・夜

部屋の中から赤ん坊の激しい泣き声。

乳母（20）が部屋から飛び出してくる。

廊下で、甚兵衛とおつねに鉢合わせる。

乳母

申し訳ございません！ もう、無理です！ お暇をいただきます！

甚兵衛

何を言っている。こんな夜更けに。

乳母（泣きながら）

あの子は……あの子は赤子じゃありません！

甚兵衛

…赤子じゃない？

乳母、何も答えず、荷物も持たずに逃げ去る。

INT. 同・寝室 一 夜

勘兵衛とおつねが、布団に横たわっている。

部屋の隅には、高価な蒔絵の施された行灯。

おつねが目を覚ます。

赤ん坊の泣き声が聞こえる。

おつねは起き上がり、ぐずり始めた赤ん坊を抱きかかえる。

赤ん坊の喉は乾いているようで、喘ぐような音を立てている。

おつねは白磁の器に水を用意し、赤ん坊の口元へ運ぶ。

おつね

ほら……お飲み……。

赤ん坊は器の半分ほどを飲み干すと、ピタリと動きを止める。

おつねが器を引こうとした、その時。

赤ん坊（しわがれた声）

……もう、半分。

おつねの全身が凍りつく。

今、赤ん坊の口から出たのは、赤子の声ではない。

あの雨の夜、自分たちが金を奪った老人の声だ。

おつね

……え？

赤ん坊（はっきりと、老人の声で）

もう半分……おくれ。

赤ん坊が目を見開く。

その瞳には、あの老人の狡猾な光が宿っている。

おつねは器を落とし、喉の奥から悲鳴を絞り出す。

INT. 同・広間 — 夜（翌日）

甚兵衛は、痩せこけ、怯えた目で、部屋の隅に座る赤ん坊を見つめている。

赤ん坊は無言で、甚兵衛を凝視している。

甚兵衛（震える声で）

間違いねえ。あのじいさんの生まれ変わりだ……。

甚兵衛、がくりと項垂れる。

甚兵衛

……ああ。やっぱりよくなかった。せめてもの罪滅ぼしに……この子を立派に育てる。それが俺たちにできる唯一の償いだ。

EXT. 豪華な屋敷 — 庭 — 昼

SUPER: 「60 年後」

かつて赤ん坊だった男——老人が、美しい庭園を眺めている。

その風貌は、かつて勘兵衛が出会った老人とまったく同じである。

仏壇の前には、甚兵衛とおつねの位牌。

老人は、悠々と酒を飲んでいる。

老人は、手元に置かれたずっしりと重たい風呂敷袋を持つと、おもむろに立ち上がる。

EXT. 居酒屋「昇り龍」 — 夜

入口に「昇り龍」の彫り物がある。

安物のためか、角が欠け、埃を被っている。

INT. 居酒屋「昇り龍」 — 夜

湿った土の匂いと、安酒の鼻を突く匂いが混じり合っている。

新次（24）が、不機嫌そうにカウンターを拭いている。

奥の小上がりでは、妻のおサヨ（20）が、手持ち無沙汰に櫛で髪を研いでいる。

る。

老人（60）が、風呂敷袋を抱えてカウンターの端に座っている。

彼の前には、空になったお猪口。

老人

……旦那。すまないが、もう半分、おくれ。

新次が手を止め、老人を疎ましそうに見る。

新次

じいさん。さっきから「半分、半分」って……。ちびちび頼まれると、こっちは酒を温め直す手間も増えるんだ。最初から一合頼んでくれよ。

老人は、痩せこけた頬を緩め、申し訳なさそうに笑う。

老人

いやあ、そう言われるんだがね。一合をドンと出されると、つい景気よく飲んじまう。だが、こうして半分ずつ注いでもらうと……どういうわけか、なんだか得をしたような気になるんで。

新次は鼻で笑い、一合升から半分だけ、老人の徳利に酒を移す。

新次

せこい楽しみだね。……ほらよ。

老人

かたじけない。……ああ、この半分が、五臓六腑に染み渡るんだ。

老人は大切そうに、震える手でお猪口を口に運ぶ。

新次が、老人の手元に置かれた風呂敷を眺める。

新次

じいさん。さっきからその包みを片時も離さないな。よっぽど大事なもんか。

老人（周囲を警戒するふりをして）

……ああ。実はね、古い蔵を壊したら、見たこともない金塊が出てきてね。今

日、それを両替商でこの「小判」に変えてきたところなんだ。

おサヨ（身を乗り出して）

金塊！？ まあ……。

老人

長いこと貧乏暮らしをしてきたが、これでようやく……。明日からは、どこか

土地へ行って、隠居生活を送るつもりだよ。今夜は、人生最後の酒ってわけな

んだ。

老人は嬉しそうに、大事そうに風呂敷包みを撫でる。

新次とおサヨが、一瞬だけ目を見合わせる。

二人の間に、重い沈黙が流れる。

INT. 居酒屋「昇り龍」 — 深夜

老人が去った後の、静まり返った店内。

おサヨが掃除を始めようとして、老人が座っていた席の下に目を止める。

おサヨ

……あなた。これ。

そこには、先ほどの風呂敷包みが残されている。

新次

……あのじいさんの忘れもんか。

おサヨ

中、見てみようよ。

新次が歩み寄り、包みを手に取る。

包みを解くと、ずっしりと重い桐箱。

桐箱の紐を解くと、鈍い金の光が、狭い店内を照らし出す。

新次（息を呑む）

小判が、こんなに……。

おサヨ（震えながら）

……ねえ。これがあれば、こんなボロ屋敷んで、江戸の真ん中で勝負できるよ。あんた、いつも言ってたじゃない。俺の腕なら、大きな店を持てるって。

新次

だがよ。この金はじいさんの……。

おサヨ

あのじいさん、もう先は長くないよ。でも私たちはまだこれから的人生がある。……ねえ、これは神様がくれたチャンスだよ。

新次は金を見つめる。

額に汗が滲む。

その時、外で激しく戸を叩く音。

ドンドン、と響く。

新次

じいさんだ！

おサヨ（新次の腕を強く掴む）

落ち着いて！ 黙ってれば、あんたが盗んだ証拠なんてどこにもないんだから！

老人（O.S.）

旦那！ おかみさん！ 開けておくれ！ 忘れたんだ、命より大事なものを！

おサヨが素早く、風呂敷包みを奥へ隠す。

新次が顔を強張らせ、戸を開ける。

雨の中、老人が泥まみれになって立っている。

老人

旦那！ あの、包みを……ここに忘れてしまったんだ！

新次（声を荒らげて）

包み？ 知らねえな。さっき掃除した時も何もなかったぞ。

老人

そんなはずはない！ 確かにここに置いたまま……。お願ひだ、中に入れさせ
てくれ！

新次

……おサヨ。お前、何か見たか？

おサヨ（冷ややかに）

いいえ。ネズミ一匹いませんよ。

老人

……嘘だ。そんなはずは……。

老人の膝が崩れる。

雨水が彼の顔を伝い、涙のように見える。

老人

あの金がないと、私は明日から路頭に迷ってしまう！ お願ひだ！ 返してくれ！

新次

七くどい野郎だ。知らないと言ったら知らないんだ！　さっさと帰れ！

新次は力任せに戸を閉め、門をかける。

外から、老人の嗚咽と雨音。

やがて、その嗚咽も遠ざかっていく。

EXT. 吾妻橋 — 深夜

土砂降りの雨。

老人が橋の欄干に立っている。

下を流れる漆黒の川を見つめる。

老人の目に、悲しみはない。

あるのは、冷徹なまでの「確信」。

老人

……もう半分を……もう半分。

老人は歪んだ笑みを浮かべる。

次の瞬間、水面へ吸い込まれるように落ちていく。

水しぶき。

暗転。

BLACK SCREEN

産声が上がる。

それは赤ん坊の泣き声というより、祝福を喜ぶ老人の笑い声のように響いた。

END